

12月 14日 (日)  創世記 45章	「わたしをここに遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」(8節)。兄たちの憎悪によって売り飛ばされた時以来、ヨセフは自分の心にふつつつと湧きおこる怒りや疑問と向い合わない日はなかったことだろう。しかし今やヨセフは、神を主語にして自らの人生を語れるようになった。神を主語にして神の慈しみを語ることができる。信仰による大きな恵みがここにある。
15日 (月)  創世記 46章	「これらは、レアがパダン・アラムでヤコブとの間に産んだ子らである。ヤコブの娘ディナも含め、男女の総数は三十三名である」(15節)。ヤコブがエジプトに下るときの家族の名の中に、34章で辛い思いをしたディナの名が記されている。神の家族は悲しみを切り捨てることなく、共に抱えながら歩む。悲しみの中に主の必ず慈しみがあらわされる時を信じて。
16日 (火)  創世記 47章	「わたしが先祖たちと共に眠りについたなら、わたしをエジプトから運び出して、先祖たちの墓に葬ってほしい」(30節)。ヤコブにとってエジプトに下ることは、父祖の約束の地を離れる痛恨の決断だったことだろう。彼は息子ヨセフに死後を託した。人間は死後を自分の力でどうにもできない。信頼して死後を委ねられる息子を与えられたヤコブの幸いを思う。
17日 (水)  創世記 48章	「今、わたしがエジプトのお前のところに来る前に、エジプトの国で生まれたお前の二人の息子をわたしの子供にしたい」(5節)。ヨセフの息子エフライムとマナセがヤコブの祝福を受けて十二部族に加えられた。かつて憎悪によって引き裂かれた兄弟たちが一つの祝福の民とされていく。人間の罪を通して慈しみを成し遂げていかれる神の業がここにある。

メール配信登録メール [senfkorn.obc@gmail.com](mailto:senfkorn.obc@gmail.com)

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

18日 (木)  創世記 49章	「これらはすべて、イスラエルの部族で、その数は十二である。…父は彼らを、おのおのにふさわしい祝福をもって祝福したのである」(28節)。死を前にしたヤコブによる祝福の歌。「十二部族」の扱いは、いわゆる「平等」ではない。「おのおのにふさわしい祝福」である。人間のものさしで比べ合うことには意味がない。神の「ふさわしい祝福」を喜び、信頼していこう。
19日 (金)  創世記 50章	「『どうか、あなたの父の神に仕える僕たちの咎を赦してください。』これを聞いて、ヨセフは涙を流した」(17節)。兄たちはヨセフの復讐を恐れた。過去の悪事は消えず、恨みも消えず、いつまでも人の心を苦しめる。これが人間の性である。神の慈しみだけがこの性を変革する。多くの苦労を重ねたヨセフをして神の慈しみを信じる者とした神の御業に、アーメン。
20日 (土)  出エジ プト記 1章	「そのころ、ヨセフのことを知らない新しい王が出てエジプトを支配し、国民に警告した」(8－9節)。歴史は忘れられ、神の慈しみも人の罪も忘れられてしまう。だから聖書は繰り返し過去を語り聞かせる。過去を今の自分たちの課題に重ねていく時、かつて語られた言葉が生きた御言葉となっていく。歴史を知らない新しさではなく、歴史から学ぶ新しさを求めたい。
21日 (日)  出エジ プト記 2章	「(籠を)開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い…」(6節)。ヘブライ人の赤ん坊を見たエジプトの王女の反応に、神が何を望んで私たちを創造されたかが示される。「ふびん(気の毒に思い、助けたくなる)」この理由で、彼女は赤ん坊が父王による抹殺命令の対象と知りながら、自分の子とした。今日はクリスマス礼拝。